

## は し が き

本プロジェクトは、ストレートトーク番組に愛着を感じている人達の集まりである。

残念なことに、ストレートトーク番組の評判は、一般にあまり良くない。退屈である、映像メディアに相応しくない……等々が、理由として挙げられている。確かに、出演者が、下ばかり見て、ぼそぼそと原稿を棒読みしているような画面が映し出されたりすると、そんな感じにもなってしまう。時には、映し出された出演者が気の毒で、見ているのがつらくなるような場合すらある。

ところが、別の機会に同じ先生の講演を聞いて、意外に話がうまいのに驚いたりすることもある。プレゼンテーションのできばえは、「場」によって違う。我々はここに着目した。

本研究は、出演者のプレゼンテーション能力そのものを高める研究ではなく、その人のプレゼンテーション能力をできるだけ引き出そうという研究である。出演者のプレゼンテーション能力の発揮度を高めるためには、演出者は、どんな工夫をすべきか、出演者にはどんなアドバイスをすべきかの研究である。

そのためには、プレゼンテーション能力とは何かを定義する必要があり、それを測定する尺度が必要であった。我々の作業は、プレゼンテーション能力を定義し、それを測定する尺度の作成から始まった。

そして、この尺度を使って、同一人でも場が違えばプレゼンテーション能力の発揮度に差が出ることを実証しようとした。また、プレゼンテーション能力を高めるであろう演出上の工夫（仮説）を同じく尺度を使って実証すべく実験を行った。

この記録が、単に講座番組の制作者だけでなく、様々なストレートトーク番組に関わる制作者にとっても何らかの参考になれば幸いである。

最後に、実験番組に協力して下さった放送大学番組の講師の先生方、宇都宮大学の粕谷英樹先生と松田勝敬さんをはじめ、尺度の作成にご協力頂いた大勢の皆様に心から感謝したい。

平成9年5月

主査 佐々木 正實